

《インドネシア・フィリピン・タイ》 2021年上半期の国軍・警察高官人事

東南アジア諸国連合(ASEAN)加盟国では、軍人・警察官が政治に関与しないプロフェッショナルとしての意識が高いシンガポールなどを除けば、国軍・警察高官は政治に対して大きな影響力を持つ。一方で、その人事には政権首脳・指導部の政治的な思惑や個人的な縁故関係などが強く反映する。国軍・警察の人事が「政界人脈」のテーマとなる所以だ。2021年上半期にインドネシア、フィリピン、タイで実施された国軍・警察高官の人事からもそうした側面がうかがえる。

《インドネシア》

■国家警察(POLRI)長官

Chief of the National Police(Kepolisian Republik Indonesia)

リストティヨ・シギット・プラボウォ警察大将

Pol. Gen. Listyo Sigit Prabowo



2021年1月27日付けで警察官・警察職員59万人を指揮する現職(第25代国家警察長官：インドネシア語の略称はKapolri)に就任。国家警察刑事局長(警察中将級のポスト)からの昇格で、階級も長官就任に伴い警察大将に昇進した。就任時の年齢は51歳8カ月で、インドネシア警察史上で最年少の長官となった。それ以前は、51歳9カ月で16年7月から第23代長官を務めた、ティト・カルナフィアン(Pol. Gen. [ret.] Muhammad Tito Karnavian)現内相が最年少だった。

*2011年に中ジャワ州ソロ市警の本部長を務め、当時ソロ市長だったジョコ・ウィドド(通称ジョコウィ)現大統領と親交を深めた。また、14年から2年間、第1期ジョコウィ政権で大統領補佐官を務めている。大統領の同(リストティヨ)氏に対する個人的な信頼の厚さが長官任命に繋がったとの見方が多い。

*カトリック教徒であり、警察長官にキリスト教徒が就任するのは同国史上で2人目となる(最初は、スハルト政権下の1974年に第7代長官に就任したウィドド・ブディダルモ〔Widodo Budidarmo〕氏で、同氏はプロテスタントだった)。異宗教・民族の融和を謳う「パンチャシラ主義」政治を掲げるジョコウィ大統領の政治思想を反映した人事ともいえる。

*長官就任に当たっての国会での適格性審査では「厳格・責任・透明性・公正」をモットーに、とかく規律の弛緩や汚職の蔓延が批判される警察機構の抜本的な刷新を図ることを宣言した。

[前任者] イダム・アジズ前(第24代)長官(Pol. Gen. [Ret.] Idham Aziz)は58歳になった1月30日付けで定年退任した。

▼データ：【年齢】52歳(1969年5月5日生まれ)【生地】マルク州アンボン【宗教】キリスト教(カトリック)【学歴】1991年警察士官学校卒、2006年警察指揮幕僚大学上級幹部学校(SESPIIM)修了、17年国家防衛研修所(LEMHANNAS)修了【経歴】1991年国家警察入庁後、(旧・西ジャワ州)タンゲラン市警察勤務を最初に、ジャカルタ首都圏警察などで要職を歴任。2009年中ジャワ州パティ警察署長、10年同州スコハルジョ警察署長。11年同州ソロ(スラカルタ)市警察本部長。12年国家警察(本庁)刑事局(Bareskrim)捜査第2部長。13年南東スラウェシ州警察刑事部長。14年(ジョコウィ)大統領補佐官。16年バンテン州警察本部長。18年本庁警務・保安部長。19年本庁刑事局長。2021年1月27日国家警察長官(一現在)【家族】ジュリアティ(Juliati Sapti Dewi Magdalena)、通称ダイアナ夫人との間に2男1女。

■国家防災庁(BNPB)長官

Head of the National Disaster Mitigation Agency

ガニップ・ワルシト陸軍中將 Lt. Gen. Ganip Warsito



5月25日付けで現職(第4代国家防災庁〔BNPB〕長官)に任命された(正式就任は6月1日付け)。国軍司令部において国軍司令官に次ぐナンバーツーである国軍参謀総長のポストから異動になった。

*自然災害大国のインドネシアでは、災害防止、救助・救援活動などの緊急対応、災害復旧・復興に関する政策の施行機関となるBNPB(インドネシア語はBadan Nasional Penanggulangan Bencana)は、大統領が直接所管する国家安全保障上の重要機関であり、慣例的に国軍の現役将官がトップに就任してきた。

*陸軍歩兵部隊の参謀・司令官としての経歴が長かったが、2019年9月に領域警備での陸海空3軍の作戦連携・調整を図るために新設された3つの統合防衛管区のうち東部を担当する第3管区の司令官を務めた。1年半後に(前職の)国軍参謀総長に就任している。

[前任者] ドニ・モナルド前(第3代)長官(Lt. Gen. [Ret.] Doni Monardo)は5月10日に58歳になり定年退任した。

▼データ：【年齢】57歳(1963年11月23日生まれ)【生地】中ジャワ州マゲラン【学歴】1986年国軍士官学校卒【軍歴】陸軍中將(現役)【経歴】陸軍歩兵将校：陸軍各部署・部隊の要職を歴任後、2016年陸軍第8軍管区(マナド)司令官(Pangdam VIII：少将)。2018年国軍司令官作戦担当補佐官(Asops Panglima)。19年9月第3統合防衛管区(東部)司令官(Pangkogabwilhan III：中將)。21年1月26日国軍参謀総長(Kasum TNI)、同5月25日国家防災庁(BNPB)長官(一現在)。

《フィリピン》

■国軍(AFP)参謀総長

Chief of Staff of the Armed Forces of the Philippines

シリリート・ソベハナ陸軍大将 Gen. Cirilito E. Sobejana



ロドリゴ・ドゥテルテ大統領を最高司令官とするフィリピン国軍(AFP：将兵14万2,350人・予備役13万1,000人)の制服組トップ(第55代参謀総長)に2月4日付けで就任。ハリー・ロケ(Harry Roque)大統領報道官は「AFPを真にプロフェッショナルな軍隊に刷新・再編する能力を持った人物」と評している。

*2016年6月に発足したドゥテルテ政権で同(ソベハナ)氏が8人目の参謀総長であるように、現職は、定年退任する直前に国軍幹部を順繰りに短期間就けるための「名誉職」的なポストと化して


いる感がある。同氏も56歳になる7月31日付けで定年退役となるために在任期間は半年足らずということになる(AFPの「刷新」に取り組むにはあまりにも短すぎる)。

＊陸軍入隊直後から対ゲリラ戦闘や密林戦闘などを担うスカウトレンジャー部隊での参謀・隊長職を歴任し、特殊戦の専門家として頭角を現した。イスラム過激派組織「アブサヤフ(ASG)」に対する掃討作戦を担当する「統合特別部隊スルー」の司令官や、後には同部隊を指揮下に置く国軍西部ミンダナオ司令部の司令官として、地元メディアで最も発言が引用される国軍幹部のひとりとなった。こうした経歴からもミンダナオ島ダバオ市出身のドゥテルテ大統領が特に信頼を寄せる「ミンダナオ人脈」の一人とあってよい。

〔前任者〕ギルバート・ガパイ前参謀総長(Gen. [Ret.] Gilbert I. Gapay)は56歳になった2月4日付けで定年退役した。

▼データ：【年齢】55歳(1965年7月31日生まれ)【生地】中部ビサヤ地方ネグロス・オリエンタル州サンボアンギタ【学歴】1987年国軍士官学校(PMA)卒、国軍指揮幕僚大学卒、国防大学卒(国家安全保障管理学)、行政修士号(MPA)取得、(米バージニア州フォート・リー)米陸軍兵站管理大学オペレーションズリサーチ(作戦研究)システム分析課程修了、(米ホノルル)米国防総省「アジア太平洋安全保障研究センター(APCSS)」高等安全保障協力課程修了【経歴】陸軍スカウトレンジャー中隊長、同大隊長、スカウトレンジャー学校長、民事作戦群(現・連隊)群長などを歴任。2003-04年国連東ティモール支援団(UNMISSET)オブザーバー(視察員)。その後、陸軍第602歩兵旅団長、「統合特別部隊スルー(JTF Sulu)」司令官を経て、18年5月陸軍第6師団(マギンダナオ州)師団長。19年6月国軍西部ミンダナオ司令部(WestMinCom)司令官。20年8月4日陸軍司令官。21年2月4日国軍参謀総長(一現在)。

■国家警察(PNP)長官 Chief of the Philippine National Police

ギレルモ・エレアザル警察大将 Pol. Gen. Guillermo Lorenzo T. Eleazar

 ドゥテルテ大統領が発令した国家警察(PNP)の高官人事で、国家警察副長官(警務担当)から現職(長官)に5月8日付けで昇格。ドゥテルテ政権下では同(エレアザル)氏の前に国家警察長官を務めた警察高官が5人いるが、全員が大統領の推進する「麻薬撲滅戦争」で「功績」を上げており、同氏も首都圏管区警察局長(NCRPO)局長時代に麻薬犯罪者の摘発に陣頭指揮を執った。

＊「麻薬撲滅戦争」は、ドゥテルテ大統領が実質的に「お墨付き」を与えた、数千人規模の「容疑者」に対する「超法規的処刑(EJK)」が内外の多くの人権団体などから厳しい批判を受けており、国際刑事裁判所(ICC)による「人道に対する罪」での予備的調査の対象となってきた。同(エレアザル)氏はこの問題では、過去5人の長官たちと比べると批判に一定の理解を示しており、警察官が「法執行活動」の名目でEJKを行った疑いが濃厚な事案に対する、独立機関「フィリピン人権委員会(CHR)」や内務自治省当局による独立した調査に協力することを表明している。

＊もともと、同氏も11月13日には56歳となり定年退役を余儀なくされるため、この短期間で「トリガーハッピー(発砲好き)」で知られるフィリピン警察の体質を刷新することはできないだろう。

〔前任者〕同(エレアザル)氏とは国軍士官学校の同期生であるデボルド・サイナス前国家警察長官(Pol. Gen. [Ret.] Debold Sinas)は56歳になった5月8日付けで定年退役した。

▼データ：【年齢】55歳(1965年11月13日生まれ)【生地】マニ

ラ首都圏マニラ市【学歴】1987年国軍士官学校(PMA)卒【経歴】1987年国家警察(PNP)入庁後、本庁の各部局や各管区警察局長・州警察本部の要職を歴任。2017年10月(首都圏)ケソン市警察地区(QCPD)本部長。18年4月第4A管区(カラバルソン地方)警察局長。18年6月首都圏管区警察局長(NCRPO)局長。19年10月PNP長官官房総務局長。20年1月20日PNP副長官(作戦担当)、3月16日統合特別本部「COVID-19シールド(Shield)」本部長(兼任：-11月22日)、9月2日PNP副長官(警務担当)。21年5月8日国家警察(PNP)長官(一現在)。

《タイ》

■国家警察庁(RTP)特別顧問(戦略担当)

Special Adviser (on Strategy) of the Royal Thai Police

スラチェート・ハックパーン警察中将(博士)

Pol Lt Gen Dr Surachate Hakpam



4月1日付けで発効したタイ国家警察庁(RTP)の定期人事(中間期)で、文民ポスト(行政職)の首相府顧問から現職(RTP特別顧問(戦略担当))に異動となった。

「特別顧問」はRTPで(長官、副長官に次ぐ)ナンバー3のポストである副長官補(assistant commissioner)待遇であり、プラユット首相を委員長とする警察人事委員会が同(スラチェート)氏のために新設したポストとされる。

＊愛称は「ビック・ジョーク(Big Joke)」。警察士官学校(RPCA)47期生の出世頭で、異例の45歳で警察少将に昇進。2010年代後半に観光警察局長(TPB)副局長や入国管理局(IB)局長を務めていた時代には、入管法違反者の摘発はもとより、他の部局の所管業務である売春組織、麻薬密売、暴走族、違法賭博、サイバー犯罪などの摘発を精力的に実施し、連日のように記者会見を開いて自らの成果を誇示した。ところが、19年4月に首相が発令した人事異動で警察組織から外され、行政職の首相府顧問に左遷された。左遷の理由は今日まで公式には説明されていない。

＊同様に4月人事での同(スラチェート)氏の突然の国家警察庁復帰の背景も謎に包まれている。ただ、昨年10月の定期人事異動で、同氏の職域を無視した「派手」なパフォーマンスを苦々しく思っていたとされるチャクティップ・チャイチンダ前警察長官(Pol Gen Chaktip chajinda)が定年退役し、王室の信頼が厚いスワット・ジェーンヨットスック現長官(Pol Gen Suwat Jangyodsuk)が就任したことが背景にあるのは間違いないところだ。スワット長官は同(スラチェート)氏の能力と実績を高く評価しているとされ、特別顧問の立場から警察改革の断行に向けて自分を補佐して欲しい、と願っているのだろう。地元メディアは「ビック・ジョーク」が近い将来に国家警察庁のトップに就任する可能性も「けっしてジョークではなくなった」と論評している。

▼データ：【年齢】50歳(1970年10月29日生まれ)【生地】南部・ソクラー県【学歴】国軍士官学校予科卒(31期生)、警察士官学校(RPCA)卒(47期生：行政学士)、マヒドン大学社会科学修士(犯罪学・司法行政学)、イースタン・アジア大学(パトゥムターニー県)博士(PhD：行政学)【経歴】警察将校：王室警護隊員、首都圏警察局長(MPB)本部付、ソクラー県警察副本部長、中央捜査局(CIB)観光警察部(現・観光警察局長)部長、191(緊急通報番号)即応部隊長、観光警察局長などを歴任し、2018年10月入国管理局(IB)局長。19年4月首相府顧問に異動。21年4月1日国家警察庁(RTP)特別顧問(戦略担当)(一現在)【家族】シリナダー(Sirinadda)夫人。

(アジア・リンケージ 勝田 悟)